港区立 港郷土資料館

資料館だより

第 65 号
2010.3.1

〈目　次〉

特集・最初のイギリス公使館東禅寺
国史跡「東禅寺」 指定に至る経緯と調査成果 …… 2
公使館の選定理由
～なぜ東禅寺は最初のイギリス公使館となったのか～ … 3
国宝 旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮） …… 4
コーナー展「愛宕下の武家屋敷」 …… 5
近世遺跡から出土した通い徳利 …… 6
特別展『増上寺徳川家霊廟』を終えて …… 7

港区指定文化財画像 web 公開

港郷土資料館ホームページの一部が新しくなりました。

ホームページ画面
（伊皿子貝塚遺跡出土遺物）

港区では、昭和54年に「港区文化財保護条例」を施行し、毎年港区指定文化財の指定を行ってきました。現在109件の文化財が指定を受けていますが、港郷土資料館のホームページでは、こうした指定文化財を「文化財総合目録」のページで紹介してきました。しかしながら、その内容は、文化財の名称など最小限の情報のみであり、どのような文化財であるかをホームページ上で見ることはできませんでした。

港区の歴史や文化を知る上で不可欠なこうした指定文化財の公開に関しては、これまでも展示等を通じて行ってきましたが、昨年度は「港区文化財保護条例」施行30周年を記念して、これまでに指定された文化財のすべてを紹介する記念誌を発行しました。これをきっかけにしてこのたび所有者のご理解を得られた指定文化財について、この記念誌で使用した画像や文字データをホームページ上でも公開することとしました。新しくなった「港区文化財総合目録」のページでは、指定文化財それぞれの画像と解説が掲載されています。画像はできる限り高画質のものを使用していますが、不正コピーを防止するために１枚の画像を極めて細かな部分に分解し再び合成する方法を採用しています。

是非一度、新しくなったページにアクセスして、港区指定文化財のすばらしさにふれてみてください（ホームページのアドレスは本誌の８頁右下にあります）。

特集・最初のイギリス公使館東禅寺

国史跡「東禅寺」

指定に至る経緯と調査成果

松本　健
（学芸員）

安政元年（1854）３月３日、江戸幕府は長い鎖国の歴史に幕を引き、日米和親条約を締結し、開国の歴史を歩み始めました。安政５年６月19日、神奈川沖に停泊するアメリカ艦ポーハタン号において締結された日米修好通商条約を皮切りにオランダ・ロシア・イギリス・フランスと次々に修好条約を結び、江戸には各国の公使館が置かれました。同６年６月１日、イギリス公使オールコックは、東禅寺を宿舎に選び、同７日（東禅寺蔵『天寿室日記』による）、30人ほどの人員と共に東禅寺に入ったのを皮切りに続々と各国使節がそれぞれの公使館にあてられた寺院に入りました。今から151年前のことになります。こうした江戸の公使館は、その全てが現在の港区内の寺院に置かれました。

維新後、大名家の庇護を失った寺院の経済状況は悪化の一途をたどり、さらに神仏分離・廃仏毀釈という仏教界に吹き荒れた大嵐や大正12年（1923）９月１日の関東大震災、昭和20年（1945）３月と５月の東京大空襲による被害もまた大きなものでした。江戸に置かれた最初の各国公使館跡は東京都旧跡に指定されていましたが、各国の公使館時代に使用されていた施設は、こうした歴史の中でほとんどその姿をとどめていない状況にあります。そうした中で、わずかに東禅寺の大玄関と奥書院および庭園のみが、イギリス公使館時代の姿を伝える貴重な遺構であるとされていました。

平成17年（2005）、東京都教育委員会は旧跡指定の再検討のため、区市町村教育委員会とともに、東京都指定旧跡の現況調査を実施しました。港区教育委員会はその調査報告において、東禅寺の「最初のイギリス公使宿館跡」については、史跡への種別変更を検討する必要があることを付記しています。

その後、文化庁及び東京都教育委員会とともに、東禅寺奥書院・庭園の現況確認を実施した結果、文化庁からは東禅寺が国史跡の指定要件を備えていると考えられる物件であるとの評価を得たことから、東京都教育委員会と協議を重ねるとともに、東禅寺とも協議をおこないました。これに対し東禅寺代表役員千代城博光氏から指定に向けてのご同意をいただいたことから、国の史跡指定を受けるための資料作成のため現況調査を行いました。

今回の調査によって、奥書院（現在は「僊源亭」と呼ばれています）についてはイギリス公使館時代の建物であり、庭園もその時代から大きな改変もなく現在に残されているものであることが明らかとなり、国の史跡として指定されることが決定しました。また、オールコックが著した『大君の都』の記述を詳細に検討した結果、文久元年（1861）５月28日に起こった「第一次東禅寺事件」の際には、東禅寺の最も格式の高い「書院（現存していません）」に、公使オールコックが起居し、当時の建物として唯一確認された奥書院（僊源亭）は、公使館員が使用していたことがほぼ確実となりました。

東禅寺が、国指定史跡となり、激動の時代の証言者として、永く後世に伝えていくことができるのも、所有者である東禅寺のご理解とご協力によるところが多いことを付記します。

特集・最初のイギリス公使館東禅寺

公使館の選定理由

～なぜ東禅寺は最初のイギリス公使館となったのか～

竹村　到
（文化財保護調査員）

東禅寺は、最初のイギリス公使館として良く知られています。では、東禅寺はなぜイギリス公使館となったのでしょうか？

その疑問の前に、まずは東禅寺の概略から見ておきましょう。東禅寺は、江戸時代の初めに日向飫肥（おび）藩の伊東祐慶（すけのり）が臨済宗の高僧である嶺南崇六を招いて、溜池に開創したのが始まりです。後に江戸城の拡大のため現在の港区高輪に移転し、江戸時代を通じて臨済宗妙心寺派の大寺院として大きな力を持っていました。

また東禅寺の檀家は、そのほとんどが武家（大名や旗本）で占められ、開基である伊東家を始めとして、仙台藩伊達家や岡山藩池田家などの大名も名前を連ねていました。

さて、幕末になって外国人が日本を訪れると、現在の港区内にある複数の寺院は公使館とされました。この地域に外国公使館が集中した理由を、吉崎雅規氏が「江戸の外国公館」（註１）の中で以下の四点にまとめています。

１、江戸の南端で外国人の上陸地点に近い点
２、由緒ある大寺院が多く、公的な施設として多人数滞在に必要な設備を整えやすい点
３、外国使節を接遇する格式がふさわしい点
４、境内に空き地があり警備のしやすい点

１と２は従来から言われてきたことですが、３と４は吉崎氏が新たに指摘したものです。では、このことを念頭に置きながら東禅寺がなぜイギリス公使館となったのか、もう少し詳しく見ていくことにしましょう。

東禅寺が外国使節の滞在先の候補として最初に登場したのは、アメリカ総領事ハリスが江戸参府を希望したときでした。このときは他に品川の東海寺や池上本門寺、愛宕下青松寺、芝西応寺なども候補とされました。結局ハリスのこれらの寺院への滞在はありませんでしたが、この後も東禅寺をはじめとするこれらの寺院は、外国使節の滞在先の候補として登場します。

では、これらの寺院の共通点はどこにあるのでしょうか？ 結論から先に述べれば、以下の三点が指摘できます。第一に比較的広い境内地があること、第二に武家にゆかりがあること、第三に寺域に子院・塔頭があること。以下、各点について簡単に説明をしていきましょう。

第一の点は、江戸の中心ではなく郊外にあったため、都市型の寺院としては広い境内地を持っていました。もちろん開港した横浜と江戸の中間に位置していたことも見逃せません。

第二の点ですが、当初外国使節の目的は江戸城への登城と将軍への謁見にありました。そのため幕府は、使節の滞在先に将軍の使者を派遣する必要がありました。滞在先には使者を受け入れるための施設が必要であり、武家にゆかりのある寺院にはそのような機能を持つ部屋があらかじめ準備されていました。

最後に第三の点ですが、子院や塔頭が存在することで、外国使節の滞在中、僧侶の生活空間を確保することができました。

東禅寺は以上の三条件を満たしており、幕府が外国使節の滞在先としてふさわしいと考える寺院でした。そのため幕府はイギリス総領事オールコックに対し、東禅寺を滞在先の候補地の一つとして提示したのです。そして、オールコックは「吾に示せし四ケ所の内東禅寺を選ひ」（註２）と書簡に記したように、四か所の中から自分で東禅寺を撰択したことがわかります。

このようにして、東禅寺は最初のイギリス公使館とされたのです。

（註１）『江戸の外国公使館』（港区立港郷土資料館、2005年3月）所収。
（註２）『幕末外国関係文書』巻之23、201号文書（東京大学出版会復刻版、1973年1月）。

国宝 旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）

川上　悠介
（文化財保護調査員）

港区元赤坂に建つ旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮 以下、迎賓館とする）は、明治42年（1909）の竣工で築100年の歴史を誇っています。平成21年度に、「明治期におけるわが国最大の記念建築であり、本格的な西欧の建築様式を採用しつつ、当時先端の建築技術や工芸美術の粋を集成したきわめて優秀な建築として価値が高い」（『月刊文化財』555号、９頁）ことから国宝に指定されました。

平成 21 年撮影の迎賓館正面

日本は、江戸時代とともに数百年続いた武家政権が終焉を迎え、天皇を中心とした体制となりました。同時代、西欧では王から民衆へ政治の主導が移り、民衆の手で国を作り上げていく時期でした。そのため、宮廷建築の時代は世界的に終わっており、迎賓館は世界で一番新しい宮殿として建設されました。

もともと迎賓館は東宮（皇太子）の御所、つまり後の大正天皇のお住まいとして建設されました。しかし、建物の完成後まもなく明治天皇が崩御されたため、迎賓館に移ることはなく、大正12年（1923）から昭和３年（1928）まで昭和天皇がお住まいになられていました。戦後になると衆議院へ移管され、国立国会図書館として利用されていました。さらに昭和42年に、国の迎賓施設としての利用が決定し、それに伴う大改修が施され、現在に至ります。

さて、この宮殿の設計者は建築家片山東熊です。片山は工部大学校造家学科（現在の東京大学工学部建築学科）を明治12年に第１期生として卒業しました。同期には、東京駅で有名な辰野金吾、慶應義塾図書館で知られる曾禰達蔵、憲政記念館内にある水準原点標庫の設計者佐立七次郎がいます。彼らの指導者は、鹿鳴館、三井倶楽部、三菱一号館などの設計で有名なお雇い外国人建築家ジョサイヤ・コンドルでした。コンドルの元で学んだ片山は卒業後、工部省、外務省を経て宮内省内匠寮に入り、宮廷建築家としてその地位を築くこととなります。

片山の代表作には、東京国立博物館の表慶館、奈良および京都国立博物館、また港区内においては旧竹田宮邸洋館（現グランドプリンスホテル高輪貴賓館）が挙げられ、その建物の性格上現在でも比較的多くの作品が良好な状態で現存しています。

宮廷建築家として華やかに見える片山は、嘉永６年（1852）に長州藩下士の家に生まれ、高杉晋作率いる奇兵隊に入隊し12歳で出陣した経歴を持っています。その際、後に大学校で同期となる曾禰とも一戦を交えたともいわれています。辰野は唐津藩の下士の出、左立も高松藩士の子であり、どこか優雅で美的センスにあふれる建築のイメージとはうらはらに、第１世代の建築家達は、幕末の混乱期を生き抜いてきた武人たちでした。

あらためて迎賓館の華やかな意匠をご覧ください。細部に日本の鎧兜など、武士をイメージした意匠を見ることができます。迎賓館は激動の幕末期を過ごした彼らの思いが、見え隠れしている作品ともいえるでしょう。

コーナー展

愛宕下の武家屋敷跡

杉本　絵美
（文化財保護調査員）

愛宕山の北東側一帯は江戸時代に「愛宕下」と呼ばれ、大名屋敷や旗本屋敷が並ぶ武家地でした。現在の新橋二～六丁目・西新橋一～三丁目・虎ノ門一丁目付近にあたる場所です。

この「愛宕下」を東西に横断するように環状第二号線（新橋～虎ノ門）が開通することが決定したため、平成15年度から東京都埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われています。

発掘調査では、当時の人々が使用した道具（遺物）や建物などの跡（遺構）が次々と発見されました。現在も発掘調査は継続中で、平成19年度時点で29か所の調査が終わっています。

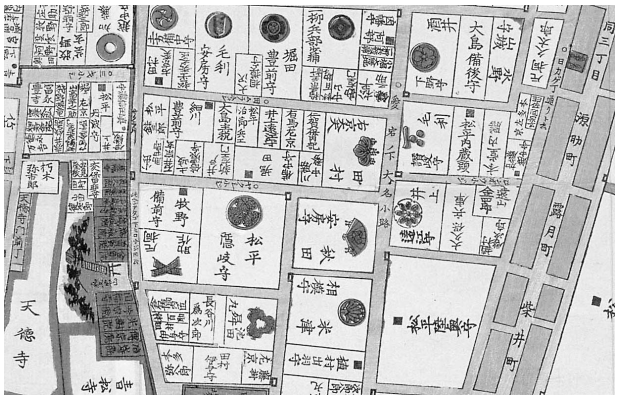
今回のコーナー展では、発掘調査が終了した第35地点と第12地点を取り上げ、調査の成果を紹介します。その中から展示資料を数点、この場で紹介したいと思います。

第35地点（新橋四丁目）では大きなゴミ穴が確認され、中から焼けた陶磁器や土器などがまとまって発見されました。

発掘調査担当者によると陶磁器の年代やゴミ穴が確認された生活面の年代から、明暦３年（1657）に発生したいわゆる明暦の大火によって被災したものと推定されており、見つかった陶磁器などは、火事で焼けて使えなくなった道具類を「捨てた」と考えられます。

また、この場所は旗本本堂家の屋敷地だったことが江戸時代の絵図からわかっていますが、その事を裏付けるように本堂家の家紋である八つ甃（いしぶみ・いしだたみ）紋が入った火鉢が発見されました。

一方、第12地点（西新橋二丁目）からは、おまじないをした跡と考えられる遺構が発見されました。調査区の南端から約90cmの大きさの穴が見つかり、中から素焼きの土器皿が24枚と木簡が11枚出てきました。第12地点は三つの武家地の境界付近にあたり、この遺構は旗本の上田家か土岐家がこの地を拝領していた時代のものと思われます。



幕末の「愛宕下」付近の絵図
『増補改正　芝口南　西久保　愛宕下之図』（安政4年）（部分）

木簡には墨で、表に八卦（はっけ）または梵字と五行[1]・呪句・「急々如律令」が、裏には梵字が５文字書かれていました。これらの文字から、陰陽道に関わる人がたずさわり、何らかの呪術行為をこの場所で行ったと推測できます。

また、穴は正方形に掘られていて、中に充填されていた土の堆積状況を見ると、穴の底に土器皿と木簡を置いた後、一気に土を入れて穴を埋め戻したようです。つまり、この穴から発見された土器皿と木簡は、ただ捨てたのではなく、当時の人がおまじないの意味を込めて「埋めた」と考えられるのです。

コーナー展では今回紹介した以外の資料も展示していますので、是非ご覧下さい。また、本庁舎１階ロビーでパネル展を行います。

コーナー展：平成22年2月19日 ～ 4月14日
パネル展：平成22年2月26日 ～ 3月17日

【参考文献】

東京都埋蔵文化財センター『愛宕下遺跡Ⅰ』2009年

※第35地点は平成22年度に刊行予定です。

(1) 古代中国の考え。木・火・土・金・水の五元素。

「近世遺跡から出土した通い徳利」

毎田　佳奈子
（埋蔵文化財調査員）

近世遺跡から掘り出された徳利には、釘書きのあるものを良く目にします。この釘書きで記号や名前が刻まれた徳利の多くは、通い徳利と考えられるものです。通い徳利とは酒屋等が商品販売用に客に貸し出した徳利で、商店と客との間を行き来していたといわれています。

釘書きは、施釉（せゆう）された胴部表面を釘状の工具で引っ掻（か）いたり、鏨（たがね）状の工具で削ったりして記されます。その内容は実に様々ですが、例えば「○と中」を組み合わせた「㊥」のように、簡易な図形と文字の組合せで表現されたものは、商店の屋号を意匠化したものと考えられています。また苗字、氏名、氏名の略したものような名前に関わるものがあります。

こうした釘書きと商店の屋号を見比べることのできる資料のひとつに、『江戸買物独案内（えどかいものひとりあんない）』（以下『独案内』）があります。『独案内』に掲載されている商品のうち、徳利への注入が可能な酒・水油・醤油・酢（味噌）を扱う店のいくつかに、出土徳利の釘書きに類似する屋号を見つけることができます。

例えば、赤坂七丁目や六本木一丁目（図２）、新宿区市谷本村町・若松町の各遺跡で見つかっている「○に万」の釘書きは、芝田町九丁目（現在の三田三丁目）で水油仲買を営む萬屋甚兵衛の屋号（図１）に類似します。

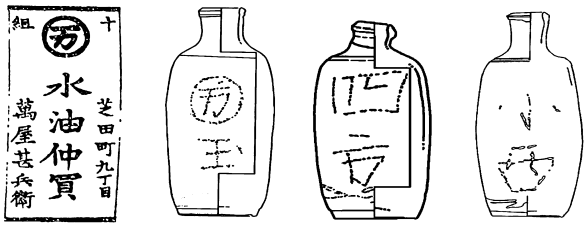


図１　図２　図３　図４

また「四方」の釘書きは、赤坂二丁目、浜松町一丁目（図３）、区外では墨田・文京・豊島・千代田区など広範囲で確認されています。この釘書きに類似する四方屋は、新和泉町（現在の中央区）で酒売場や醤油・酢問屋を営んでいた商人のようです。図４の「小西」の名は『独案内』の下り酒屋等の欄に見ることができます。

さて、このような通い徳利とされる徳利ですが、近年いくつか興味深いことが明らかになってきました。

先述した「四方」の釘書き徳利は、四方屋のあった新和泉町から、直線距離にして７km以上も離れた豊島区巣鴨から出土しています。「○と万」の釘書きにしても、最遠で４km以上離れた新宿区若松町で出土しているなど江戸市中の比較的広い範囲で確認されています。

また『独案内』では味噌問屋とされる佐野屋利兵衛の屋号を示す「□と松」が、徳利の釘書きとして確認されています。これは、酒・醤油・酢の複数の商品を扱っていたされる四方屋のように、佐野屋も味噌以外に液状の商品を扱っていた可能性が考えられます。扱っていたのは、他の店と同様に酒や醤油・酢だったのかもしれません。

ところで『独案内』には未掲載ですが、当時の酒屋としては高崎屋が広く知られていました。高崎屋は文京区本郷に本店を構え、周辺に多くの支店を持つ大店でした。この商店を表すと思われる「高サキ」の釘書きは、文京・豊島区では多くの出土例がありますが、当区では釘書き徳利が500点以上出土しているにもかかわらず、今のところ出土例がありません。

釘書きのある徳利の出土状況だけで断定はできませんが、こうした出土地点の偏りは、酒屋のお得意先の違いや流通範囲を示しているのかもしれません。当時の通い徳利のあり方を考える上で興味深い一例です。

特別展『増上寺徳川家霊廟』を終えて

高山　優
（学芸員）

平成21年10月25日より始まった特別展『増上寺徳川家霊廟』は、11月29日の日曜日、５週間の会期に幕を閉じました。この間、3,257名の見学者を迎えることができました。

当館では、折に触れ増上寺徳川家霊廟関係資料の収集･調査を進めてきました。その多くは、浮世絵などの絵画資料や近代に撮影された古写真でしたが、平成18年に第六代将軍家宣（文昭院）廟に献備された灯籠の配置と奉献者を記した「増上寺 文昭院殿御霊屋前御銅灯籠并石灯籠建場之絵図」を入手することができ、平成20年には、増上寺で第二代将軍秀忠（台徳院）廟の様子を描いた「台徳院御霊屋絵図」を見出すに至りました。ともに天地が180cm に達する大型の図面で、この２点の絵図が、今回の特別展開催の大きな原動力となりました。

展示は、「プロローグ－増上寺徳川家霊廟の世界へ」「一 増上寺徳川家霊廟の造営と結構」「二 増上寺徳川家霊廟の運営」「三 増上寺徳川家霊廟の変貌－閉ざされた空間から開かれた空間へ」「エピローグ－増上寺徳川家霊廟の近代、そして戦後」の５部構成とし、増上寺徳川家霊廟の変遷をたどりながら、その歴史的な意味を考えました。

学芸員による展示解説

展示資料は全部で59点、決して多いとはいえませんが、絵図・文書・古写真など増上寺徳川家霊廟の歴史を学ぶ上で欠くことのできない資料を一堂に集めることができました。

増上寺の徳川家霊廟は、昭和20年（1945）の空襲によって多くの建造物を失いました。現在、300年余にわたって威容を誇った霊廟の姿を目にすることはできません。しかし、会期中に戦前の様子を鮮明に記憶されている方々が来場され、在りし日の霊廟の姿に関する貴重な話を伺うことができました。このことは、霊廟関係資料の新たな情報がもたらされたことと合わせ、この特別展の大きな成果となりました。

また会期中、特別展に関わる全4回からなる資料館講座を開催しました。初回は、徳川家霊廟を含む増上寺の江戸時代から戦前までの移り変わりを、主に記録資料からたどりました。第2回目は増上寺で執り行われた将軍の葬儀のあり方や、将軍葬儀から見えてくる増上寺像について学びました。第3回目では霊廟の献備品、特に諸大名から奉献された石灯籠に注目し、徳川家霊廟の石灯籠の特質や、石灯籠研究に期待される課題について考えました。最終回は、建造物をテーマとし、主に近代の写真資料・絵画資料を材料に、増上寺徳川家霊廟の建造物に見られる特徴を知り、造営技法や修復の様子についての知識を深めました。

さらに、特別展にあわせて２件の連携事業を行いました。一つは港区産業振興課との連携事業として行った「史跡めぐり」、もう一つは東京都公文書館が同施設内で開催した展示会です。史跡めぐりでは、将軍葬列のルート－増上寺から虎ノ門－をたどり、東京都公文書館では、同館所蔵の資料から近代以降の霊廟の様子を垣間見ました。
いずれも好評のうちに、幕を閉じました。

事業予定（平成 22 年3月～）

展　示

・コーナー展　「新収蔵資料展」　４月１６日～６月１６日
・コーナー展　「寄贈資料展」　　７月２日～８月１８日
・コーナー展　「港区ゆかりの人物ー齋藤茂吉（仮）」
　　８月２０日～１０月９日
・常 設 展　　適宜展示替えを実施します。

講座など

・資料館講座　「港区ゆかりの人物ー齋藤茂吉」
　　３月１２・１９・２６日
・土曜体験教室　「古代のアクセサリーを作ろう」
　　４･６･１０･１２月･平成２３年２月
・親子学習会　５月～６月頃開催予定
・古文書教室　６月～７月頃開催予定

・このほか、資料館講座、小・中学校の夏休み期間中には、夏休み学習会や体験ミュージアムを行う予定です。
・各事業の詳細は、『広報みなと』または郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問い合わせください（連絡先は本頁右下に記してあります）。

事業報告（平成 21 年 10 月～平成 22 年2月）

① 特別展「増上寺徳川家霊廟」　10 月 25 日～11 月 29 日
② 資料館講座「増上寺徳川家霊廟の世界」（全4回）
　　11 月 6･13･20･27 日
③ 土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう」
　　平成 21 年 10 月 3 日･12 月 5 日･平成 22 年 2 月 6 日
④ コーナー展「都電－港区の路面電車」
　　7 月 1 日～10 月 10 日
⑤ コーナー展「大名家の膳具」
　　平成 21 年 12 月 12 日～平成 22 年 1 月 20 日
⑥ コーナー展「平成 21 年度港区指定文化財展」
　　1 月 28 日～2 月 17 日
⑦ コーナー展「愛宕下の武家屋敷跡」　2 月 19 日～開催中

刊行物案内

『増上寺徳川家霊廟』〈特別展展示図録〉

平成 21 年度に開催した特別展『増上寺徳川家霊廟』の展示図録。空襲で焼失した在りし日の「徳川家霊廟」の姿を辿ります。（頒布価格 1000 円）

『佛日山東禪寺 最初のイギリス公使館跡に係る現況確認調査報告書』

最初のイギリス公使館とされた、佛日山東禪寺（港区高輪）に関する調査報告書です。（頒布価格 600 円）

【平成 22 年 3 月末刊行予定】

『増補港区近代沿革図集　麻布・六本木』

江戸時代から現在までの沿革図を掲載し、地域の解説を収録した、利用範囲の広い一冊。昭和 22 年・昭和 60 年代と近年の地図を加えるなど、最新の情報を反映した増補版です。（頒布予定価格 1700 円）

『研究紀要 12』

前号より続く品川台場築造日記の翻刻、齋藤茂吉に宛てた妻輝子の書簡（新出資料）の紹介、さらには文人大名鍋島直條の江戸滞在記に関する論考、古写真研究に新たな視点の提供とその実践に関わる報告などを収録しています。（頒布予定価格 1300 円）

『港区人物誌四 齋藤茂吉』

港区ゆかりの人物である齋藤茂吉は、アララギ派の代表的な歌人であり精神科医として、明治 40 年（1907）から昭和 20 年（1945）までの間、港区青山を生活の拠点としていました。茂吉の生涯を概観する一冊です。（頒布予定価格 500 円）

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は展示室横の事務室で行っています。

港区立港郷土資料館の利用案内

交　通　JR「田町」駅下車徒歩5分，都営地下鉄「三田」駅下車（A3出口）徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分，港区コミュニティバス(ちぃばす)「田町駅前」停留所下車徒歩2分，「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間　9:00～17:00

休 館 日　日曜日・祝日・第3木曜日
年末年始・特別整理期間

※外壁工事特別休館※
平成22年3月4日（木）～3月11日（木）

入 場 料　無料

『資料館だより』 65 号
平成 22 年（2010）3月1日 発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014 東京都港区芝 5-28-4
Tel. 03-3452-4966
Fax. 03-5476-6369
http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/

港区は、環境に関する国際規格 ISO14001 の認証を取得しました。
港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この印刷物は、古紙を利用した再生紙を使用しています。

刊行物
発行番号
21116-7541